

東京高齢者協同組合創立の反響

設立準備活動の特徴にふれて

上村 光 赤 (東京高齢者協同組合・事務局長)

9・14創立総会に参加者がみたもの

全国10番目の旗揚げとなる東京高齢者協同組合の創立総会が9月14日東京日比谷公会堂で開催された。朝から終日激しい雨が降り続く、高齢者が出掛けるには最悪のコンディションのなか、1300名の参加者があった。その模様を翌日の東京新聞は、カラー刷りの最終ページでこう伝えている。

「わー、急な階段」

「大丈夫？」

横なぐりの雨の中、高齢者たちが声を掛け合っており、続々と公会堂の急な階段を上がっていく。(中略)

参加した高齢者たちは意欲満々。「創立総会ニュース」には、社会参加・自主福祉への希望がみなぎった300通を越える手紙の一部が紹介されていた。

「仕事をやめ、これからは孤独な毎日が続くとか暗い気持ちでいたが、協同組合で生活に希望がもてそう」(板橋区、70歳)

「この15年で両親と義理の両親を一人で送った。今後は人の中に入り、自分らしい人生を全うしたい」(大田区、57歳)

(後略)

総会参加者から寄せられた意見・感想文が労協新聞9月25日号に紹介された。

「わたしの夜明けです。いままで生きて来たことが無駄ではなかったと思い、うれし涙がでてきま

した」(57歳女性)、「……これから、今から、をモットーに何事にもチャレンジしたく存じます。本当に有意義な1日でした。明日への夢に希望をもって羽ばたきたく存じます」(60歳女性)、「今年1月にくも膜下出血で妻をなくしました。悲しみのなか、これから如何に生きて行くか、自分さがしの状態でした。そのなかで出会ったのがこの協同組合です。創立のことば「人間らしく最後の一瞬まで輝いて生きたい、を感動をもって受け止めています。この組合で何か自分を役立て、生きがいをもって生きたいと切におもいます」(68歳男性)、「今まではポスターやピラをあまり信用せず、また興味なくおりました。今回は何故か何う気持ちになりました。今回はじめて組織に入ってもいいと思いました。よろしければ私の家をいつでも提供致します」(69歳女性)。「組合員が気軽に発言できる小集会を各地区で開いてください。そこででた意見や希望はどんなことでも前向きにとりあげ、その発言が生きる方法を考えてください。われわれは発言者にならなければいけません。また、それにとまなう行動をそれぞれの状況に応じて行っていけるようにしましょう」(75歳男性)

「古い」という語感のもつ響きには程遠い、みずみずしさ、清新さ、あるいは「軽やかさ」さえ漂っている(ように筆者は感じる)。

記念講演で若月先生は、「楽しく生き、生きがいをもつこと。みんなとつきあい、仲良く楽しく生きていれば、血の流れがよくなる」と話された。

その気持ちのよい「流れのよさ」を、感想文の書き手に感じるのである。

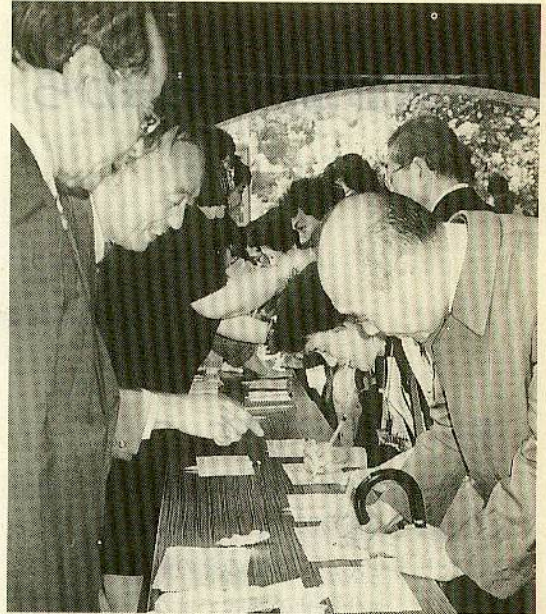
設立運動の「のびやかさ」

東京での高齢者協同組合づくりのとりくみは、その先頭になってきた田中羊子氏によって本誌52号（7月）にレポートされているので参照されたいが、大きな特徴があった。それは、有力な組織（や幹部）の力に依存しないで、あくまでも下から、講座や地域懇談会で出会った人々が力をだしあうことにこだわり、権威や「指導性」といった「上からの力」に頼らなかったという点である。事務局的作用を担ったセンター事業団東京事業本部の若手事務局員は、経験豊富な高齢者に懇談会の場でときに叱責され、惨めな思いをする場面もいくどかあったという。会合が「行きつ戻りつ」の様相を呈することも少なくなかった。ピラミッド型に組織が形成されていくのとはまるで違う進み方をしたのである。

総会当日、地域準備会に声かけあって要員集合時間にあつまった地域の高齢者は40人に上ったが、そのなかには8月中旬以降に加わった本部では顔も知らない人達は何人もいた。組織の枠にあわせるような「枠」もなく、趣旨に賛同し総会を成功させたいと思う人々が自由意思で裏方をやっている。舞台上で語る10人の発言も全く個人的でのびのびと自己表現している。議案提案の田中羊子氏は「できる、できない、というまえに、^ニやろう、という仲間をつくり、ダメでもともとでやってみたい。これをやりたいと強く願い、行動し始めた人のところから事実はつくられていく」とよびかける——。そんなわけで、「組合に入るメリットは？」とかのリクツや説明を越えて、「ここでは自分を発揮できそうだ」という雰囲気のようなものが、たぶん9月14日の会場には流れていたのではなからうか。

「非営利・協同の地域市民事業」の時代が

発足から2週間ほどたった頃、東京都生活文化局からシンポジウムの正式案内が東京高齢者協同



組合に届いた。題して『参加しませんかNPO—市民による経済活動のゆくえ』ある。「非営利・協同の地域市民事業」が社会的役割を高める時代に入っていることを行政も意識している。「コミュニケーション・自己実現・生きがい」をベースに「人と地域が必要とする仕事をおこそう」という高齢者協同組合は、この時代のテーマにくっきりと焦点をあわせて登場した、と洞察鋭い人々の視界に写っているようである。

11月28日、東京高齢者協同組合・日本労協連主催で『全米退職者協会次期理事長パーキンス氏に聞く』を開催することになった。アメリカ最大のNPOである同協会への関心は各方面で高く、労働省、厚生省、東京都や三井海上火災、NEC、キャノンなど企業も後援、協賛してくれる予定だ。（参加申し込みの第1号は、「ユニチカから3名」（10月5日）。加入申し込みと問い合わせ、地域の懇談会、葬送や谷中銀座の市場（注）での事業開発の部会、そして国際イベント……。順風すぎて風を受けるマストはもたない？

（注）商店街にある市場の半分くらいのスペースを高齢協で活用しないか、と地主さんが協力を申し出てくれた。